様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月7日現在

機関番号：34523
研究種目：基盤研究(B)海外
研究期間：2009～2011
課題番号：21401043
研究課題名（和文）台湾原住民１３族の伝統的織物の制作技術と文様色彩にみるアジアンデザインの構造比較
研究課題名（英文）A study on the technology and pattern and color of traditional textiles of Taiwanese aborigine 13 peoples

研究代表者　黄　國賓（HUANG KUO-PIN）
神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・助手
研究者番号：50441382

研究成果の概要(和文)：
本研究は、時代や居住環境の変わることによって、「台湾原住民族」の織物にみる文様、色彩、技術が現在までどのようにあり続けてきたのか、台湾原住民13族の織物における1.「台湾原住民族伝統織物の文様分類を試みる」2.「台湾原住民の色彩認識および配色感性の発達について」3.「台湾原住民の織物技術について」などのテーマに着眼し、外来民族の文化的影響を受けて変容した原住民の伝統的な織物に見られる文様、色彩、及び制作技術の構造について考察し、その織物の文化的な構成原理を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This study is 1.”Attempt to classify a pattern of Taiwan aboriginal textile tradition.”2.”On the development of color recognition and color sensibility of Taiwan's indigenous peoples.” 3.”Taiwan Aboriginal textile technology.”Focused on the perspective of three, made it clear the constitutive principle of cultural fabric of Taiwan's indigenous peoples.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
総　計	7,300,000	2,190,000	9,490,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：台湾原住民族、織物技法、織物技術、織物文様、色彩語彙、配色原理

１．研究開始当初の背景

「台湾原住民族」の研究は、これまで『台湾原住民の集落空間と固有文化からみる集住環境の構成原理に関する研究』（科学研究費補助金平成19～20年度、代表　齊木崇人）を行い、合計9族の台湾原住民の織物の文様や色彩について研究を深めてきた。「台湾原住民族」の織物の技法、文様、色彩の研究を進めていく過程で、17世紀初頭に平地から山地へ移住した「台湾原住民族」の織物と日本植民地時代の統治による「台湾原住民族」の織物と、台湾国民政府の介入による強制的遷村の結果によって生み出された「台湾原住民族」の織物の変化は、現在までの「台湾原住民族」の織物文化を保存するという視点から見ても、とても重要な課題である。

本研究メンバーは、これまで中国、台湾、韓国など東アジアの伝統文化にみる造型原理、図像、文様、伝統色について研究・分析を進めてきた。その中で、「形」や「色」「集落とその居住環境」などは、それぞれ国の文化の象徴や審美観、宗教、信仰及び社会規範などを理解するための重要な「可視的要素」であったと認識した。

２．研究の目的

時代の変遷と共に「台湾原住民族」は、かつて多くの外来文化要素を盛んに取り入れながら、各部族の固有の文様と色彩を育んできた。しかしながら、その固有の生活文化は大きく変容し、特に伝統的服装に見られる文様と色彩の持つ固有文化は失われつつある。そのため、これまで研究を進めてきた9族の織物の資料をベースに、その近隣集落の文様をさらに収集、分析することは、至急の研究課題であると考える。

本研究は、時代や居住環境が変わることによって、「台湾原住民族」の織物にみる技術、文様、色彩が現在までどのようにあり続けてきたのか、台湾原住民13族の織物における「文様の地域的特性と制作技術」「文様の意味と信仰観」「織物の色彩の選定要因と染色技術」などのテーマに着眼し、外来民族の文化的影響を受けて変容した原住民の伝統的な織物に見られる文様、色彩、及び制作技術の構造について考察し、その織物の文化的な構成原理を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、日本の統治時代より残されている研究資料や現在各博物館にみられた台湾原住民族の織物の資料、フィールドワークにより収集された資料を手掛かりに、「図解による織物の文様分析」「色見本による織物の色彩視感度測定」「織物の構造解析による復元」などのデザイン学の視点から時代差によって生み出された原住民の織物にみる1.「台湾原住民族伝統織物の文様分類を試みる」2.「台湾原住民の色彩認識および配色感性の発達について」3.「台湾原住民の織物技術」に主眼を置き、台湾原住民族の織物の文化的な構成原理を明らかにした。

４．研究成果

(1)「台湾原住民族伝統織物の文様分類を試みる」について

本研究は形態類似の分類法を用いて、台湾原住民族の織物における文様を幾何学形文様(表1)、人像文様(図1)、太陽文様、その他(文字記号文(図2)) など四つの文様系統への分類を試みた。

形態類似の分類を通して、本来各種族がもつべき固有文様の形態をはっきり明瞭化させるだけではなく、地域差によって作られた文様特色や織物の文様のもつ文化的背景要因も読み取ることができた。

菱形家系図からみた台湾原住民族の信仰は南から北に向けて、おおよそ、「蛇文化」→「蛇の昇格文化(ピュマ族における龍の鱗)」→「龍の昇格文化(サイシャット族、タロコ族、タイヤル族のような祖霊崇拝)」三つの信仰段階が読み取れた。それらの信仰概念は文様の作成にも影響を与え、同じ菱形文の表現と言っても北部へ行けばいくほど複雑化する傾向がみえた。

また、幾つかの特定の文様系統は、その使用が特定の種族に限られていることも分かった。例えば「V字菱形文」(図3)はパイワン族、「X字菱形文」「文字文」(図4)はタイヤ

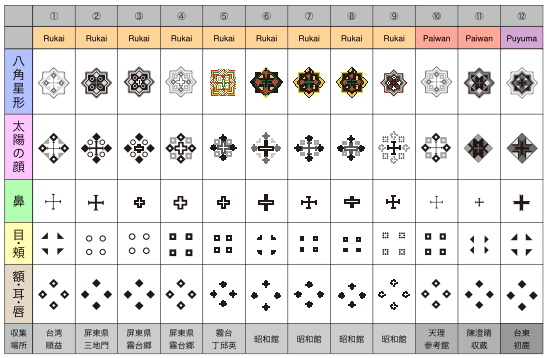


表1　幾何学形文様系統における文様の比較作図例。図は「八角星形太陽文」の構造原理と地域特色の比較

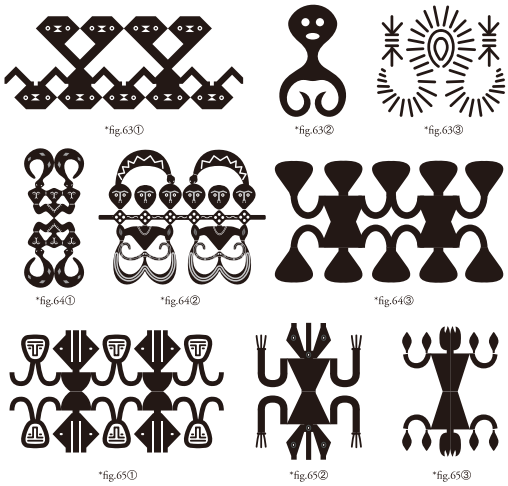


図1　人像文様系統における比較の作図例。図はパイワン族の伝統服によくみかける上半身文の比較。

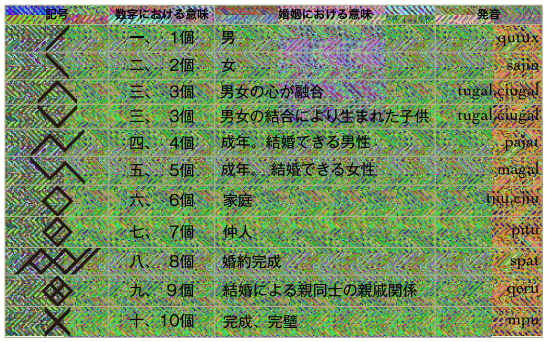


図2　タイヤル族の織物にみた「Biru」の文字記号及びその意味。巴義慈（パーイージ）神父の取材により。

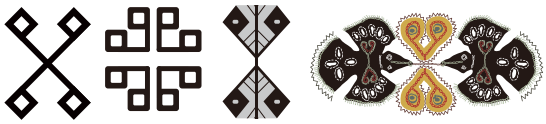


図3　パイワン族の織物にみた「V字菱形文」の一例。V字形文様はパイワン族にとっては百歩蛇の頭を象ったものである同時に祖先(百歩蛇) でもあると判明した。

図4 桃園県復興郷タイヤル族の伝統織物織物から抽出された文様(右)。「Biru」の基本記号である「/」「\」で構成されている。

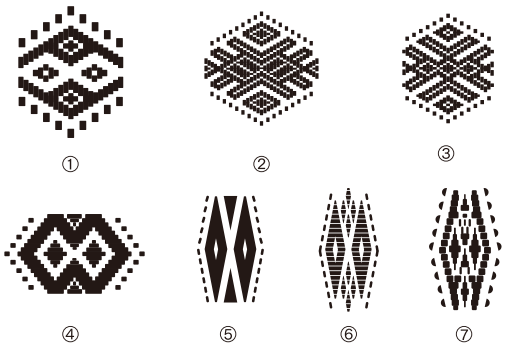


図5 「不等辺六角形」は祖霊を象ったものと言われ、その形態は時代の変遷や地域、作者が変わっても、基本的な形態の特色はあまり変わってない。台湾原住民族の中には多く使われているのがタロコ族のみである。

ル族、「八角星形文」はルカイ族、「不等辺六角形」(図5)はタロコ族、「十字形文」はピュマ族、「人像文」「太陽文」はパイワン族とルカイ族の織物にのみ見られる。

本研究は、原住民族の文様を系統化させることにより、各族のアイデンティティを確立させることができるだけではなく、各族の信仰観、審美観、社会観、情報伝達観を比較する際、または博物館に収蔵された織物の出所を鑑定する際に有効な手掛かりとして役立つと考えられた。

(2)色彩カテゴリー数の分析結果(表2)

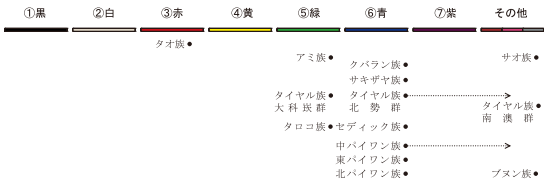


表2 台湾原住民の色彩カテゴリーの数

色彩カテゴリーの数や地域別の比較分析を総合的に考察すると、台湾原住民諸族が以下のような色彩発達を遂げてきたことが伺える。

①「黒」は台湾原住民の色彩認識の中で最も基層的な文化を構成する。

②「赤」はその次に重要な色として注目されてきた。

③「白」は古くから接してきた素材の色であるにも関わらず、「色」としての認識は赤に遅れている。

④「黄」は「白」と前後して現れた。

⑤「緑」と「青」の発達順番は低い色であり、「緑」は「黄」から、「青」は「緑」からそのカテゴリーが独立したと考える。

⑥「紫」のカテゴリーを持つ部族は比較的少なく、同じ部族でも地域によってその発達度が大きく異なる。

⑦「桃色(ピンク)」「茶色」「グレー」を挙げる人が稀に見られるが、これらの色についての認識は部族内でも少数の人に限る。

以上の結果より、台湾原住民の色彩認識の発達は、バーリンとケイのまとめたパターンとはその白や青の順番に違いが見られる。これは、台湾原住民の色彩発達の独自性であると考える。

(3)台湾原住民の織物に見られる色彩

台湾原住民はほとんど染色の文化を持たず、絶えず外来の素材や染料に頼って、その色彩文化を発展させてきた。それにも関わらず、台湾原住民諸族の言語からは、しっかりとその色彩文化の発達を見ることができた。また、その織物の色彩使用にも、色彩語彙の発達と連動した豊かな配色の感性が発達してきたことをうかがうことができた。

本研究は、台湾原住民諸族の色彩認識発達および配色感性について総合的に分析した結果、台湾原住民の色彩認識と色彩感性の発達については、大きく以下の五つの発達段階でまとめることができた(表3)。

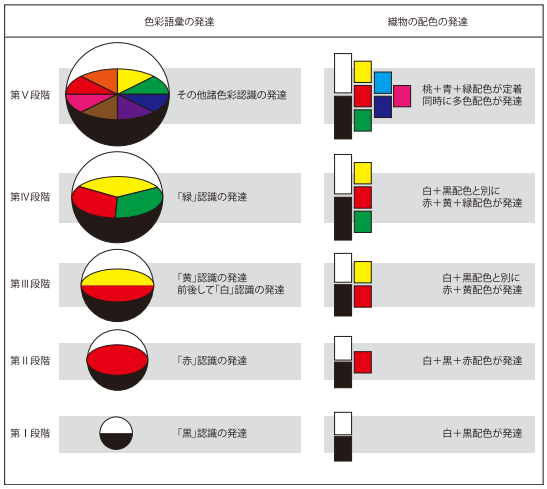


表3 台湾原住民の色彩認識・色彩感性の発達について

第Ⅰ段階

「黒」の語彙が見られ、白地に黒文様の織物が発達。この段階での白地は素材そのものであり、未だ「白」という色彩語彙は出現していない。「黒」は古代から泥媒染による染

色が行なわれてきた色であり、「黒」の認識と使用は原始時代に遡る。

第Ⅱ段階
「赤」の語彙が見られ、織物には白地に黒と赤を用いた文織が発達。この段階でも白地は素材そのものである。初期の「赤」は原住民が周辺の素材で染色した赤茶色であり、大航海時代に赤い毛糸を手に入れるようになると、原住民の「赤」への関心は一気に進む。赤い毛糸は主に緯糸として使われたので、タイヤル族・アミ族・ブヌン族・サイシャット族の織物には緯浮織が発達した。

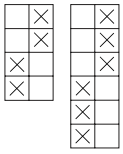
第Ⅲ段階
「黄」と「白」の語彙が前後して現れ、織物では「赤＋黄」「黒＋白」の配色が意識的に行なわれた。しかし、その配色から見ると、「赤＋黄」は「黒＋白」と同様に「明暗配色」的な考え方で行なわれていたと考える。タイヤル族の地域では祖先がウコンや福木染めにより「黄」を得たという話も聞くが、それはおそらく漢人が移住してから、漢人から学んだと考える。なお、木灰や粟の灰を使って漂白するようになり、「白」への認識が高まったと考える。

第Ⅳ段階
「緑」の語彙が現れ、織物には「黒＋白」配色の伝統を受け継ぎながらも、「赤＋黄＋緑」配色が発達し、「明暗配色」に次いで「色相配色」という新たな配色パターンを築いた。「赤＋黄＋緑」配色は、パイワン族・ルカイ族・ピュマ族の民族服の装飾において重要な役割を担っている。

第Ⅴ段階
化学染料や外来の色糸が手に入るようになり、一部の部族には「青」や「紫」「桃色（ピンク）」「茶色」「灰色」の色彩語彙が出現し、織物にもこれらの色彩が多用される。特に「桃色」は、赤紫系統の明るい色から薄い色まで幅広い色彩を含み、タイヤル族・アミ族・ピュマ族・ブヌン族など多くの部族に好まれる色となり、「桃＋青＋緑」配色が新たに出現した。なお、ブヌン族・タイヤル族の織物には、水色や桃色、紫を含めた多色配色が発達し、「暈し」「重ね」「対比色配色」などの多様な技法が発展した。
本研究は、上記した色彩の発達について考察する中で、それぞれの部族の色彩の文化的意味や社会的なヒエラルキー、および配色感性についてのアイデンティティについても、断続的に明らかにすることができた。

(4)台湾原住民の服装にみられる技術
①平文織(plain weave)
平文織は織構造の中でもっとも緊密な組織であり、二本の経糸と二本の緯糸からひとつの完全組織(repeat）を構成している。台湾原住民の平文織は、一般的に経糸の密度が緯糸の密度より大きい。特に、経糸による縞文様を織り出す場合、すべて顕経平文織となっている。たとえば、経糸が黒と白が一本ずつ並ぶなら、黒と白の縞文様が現れる。

②平文花織(plain weave with the pattern picked out on the warp)
平文花織は平文組織を基本組織とし、二種類の異なる色の経糸が1:1の順に並び、経浮または緯浮によって文様を現わす方法である。経浮による花織は、杼口の下に沈んでいた経糸を引き上げて、経糸による浮き文様を作る方法である。通常経糸の飛び数は三本までとする。一方、緯浮による花織は、緯糸が経糸を三本以上（五本、七本）跨って、浮きあがった緯糸による装飾効果を生み出す方法である。

③経畝織組織(warp rib weave)

変化平織の一種。杼口が開くたびに、二本以上の緯糸（経浮二本以上）を入れる。経糸の密度が高いと、表面からは緯糸がほとんど見えない。
宜蘭県南澳地域のタイヤル族の多色織錦は、経畝織を基本組織とする。大きめの文様が特徴で、地糸を浮かせて文様を表すため、手間がかかり、大変複雑に見える。南澳織錦は、経糸と同じ色の地緯を用いるのではなく、直接二、三本の色糸で織り出すため、色糸は表の文様として浮き上がるか、または平文の間に挟み込まれ、織物の背面には緯浮の糸が見られない大変丈夫な構造をしている。

④緯畝織組織(weft rib weave)
変化平織の一種である。三本の経糸を合わせて一本化し、間接的に経糸の密度を下げることにより、上下の色緯糸が緊密に並び合って、経糸をほとんど完全に覆い隠す。完全に緯糸によって文様が表現される織り方である。このような織り方は、ブヌン族の女性が男性の盛装を織る際に用いる特殊な技法である。

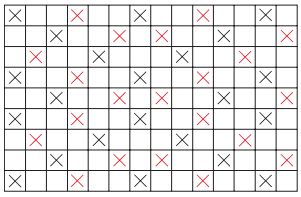
⑤斜文織(twill weave)
最も小さな斜文の完全組織は三本の経糸と三本の緯糸から構成され、「三枚斜文(three - leaf twill)」とも呼ばれる。その特徴は、主に表面に連続的な右斜文、或いは左斜文を形成する。台湾原住民の織物は、通常二上一下の経浮斜文が多く、しかも経糸の密度が高くて、布面上の斜文の角度が45度以上となる。

⑥山形斜文(zigzag twill)
綜絖通しの際、同じ方向に数回通し、再び反対方向に数回通す。緯糸を打ち込む際には、ひとつの循環単位で数回繰り返して打ち込むことにより重層的な大きな菱形文様を織り出

す。ブヌン族の織物は、大きな山形斜文が一般的である。

⑦変化斜文組織(fancy twills)
タオ族の紺・白による菱形の花織は、それぞれ五本経浮の菱形斜文織と平織を組み合わせた混合組織である。経糸は白、緯糸は紺色とし、裏面を見ると緯糸の密度がかなり高いことが分かる。

⑧双経単緯の菱形組織(diamond twill)



赤と白の二色の経糸を一本ずつ交互に並べ(1:1)、赤色の緯糸を用いると、赤地に白点の菱形文様が織り込まれる。もし緯糸を白糸にしたら、白地に赤点の菱形文様となる。台湾中部泰安郷のタイヤル族の織物によく見られる縞状の装飾文様であり、異なる色の経糸を巧妙に並べた変化斜文織により、多様な小型菱形の連続文様が織り出される。

⑨絵経(extra warp)
絵経は、基本的な一組の地経のほか、一組の色経を加えて文様を作り出す技法である。台湾原住民の織物の中で、タイヤル族は最もこの技法に長けている。
南投県仁愛郷のセディック族の「ミリ織」は、一組の黄土色を地経とし、一組の赤の浮経（warp flot）を用いた平織組織である。２組の経糸は１：２の比、つまり、１本の黄土色の経糸と２本の赤色の経糸が組み合わせられる。経糸の飛び数は常に３本となり、全体的に赤い経糸による菱形の文様が浮き出る。

⑩絵緯(extra weft)
「絵緯」とは、平織或いは斜文織を地に、絵緯を加えて文様を作る技法であり、その追加した色緯糸を「絵緯糸」と呼ぶ。これは台湾原住民の伝統的な織物における装飾文様の表現に多く使われる織り方である。

⑪織＋繍
ツォウ族の胸当ては、白色の経糸に鎖刺繍の技法で織る。経糸三～五本ごとに一針ずつ鎖刺繍を行い、逆の「人」の形の構造を形成する。二色の文様を出す場合は、二つの針で交互に経糸に刺繍していくため、布の裏面には遊び糸が残される。

⑫十字繍(クロスステッチ)
ルカイ族やパイワン族、ピュマ族の服飾は、クロスステッチを多く用いる。一般的には、経緯密度が比較的低い黒色の平織の生地に、二本の経糸と二本の緯糸から構成される方形を単位とし、それぞれの方形に色糸で「×」の形に縫い付ける方式である。

⑬平行直線繍
平行直線繍は、同じ方向の直線に刺繍して文様を作る技法である。
ルカイ族には、また白色の平織の生地に、直線で黒色の文様を刺繍する技法があり、これは絵緯花織に類似する。なお、中部日月潭の辺に暮らすサオ族の服飾には、点線状に連続三角文様が刺繍されている。

⑭交差斜文繍
台湾原住民は、二色の交差した斜文繍を用いて、さまざまな装飾や刺繍綿布を衣服に縫いつける。刺繍方法は、まず生地の縁を五本の平行斜線状に縫い、それから別の色糸で反対方向に交差して五本の斜線を刺繍する。交差していない部分が三角形を形成する。

⑮珠繍(ビーズ刺繍)
ルカイ族とパイワン族の貴族の豪華な盛装は、ビーズ刺繍による装飾を施す。円形のビーズのほかにパイプ状のビーズもあり、その刺繍方法は同じである。

⑯切伏(貼布繍)
貼布繍は、一枚の無地の綿布に文様の形に切り取った色布を縫いつけ、色布の輪郭線に沿って毛布の縁縫い(blanket stitche)の方式で、しっかりと生地に固定し、さらに外縁の輪郭を「逆鎖繍」して、文様を強化する。

⑰うなぎ骨繍
原住民の服飾の背面や肩掛けなど、二枚の布を縫い合わせる場合に使う。重なり合った交差斜文で突出した立体的な直線を形成する。

⑱組紐ボタン(braid of frog closures)
八本の糸で編み、パイワン族やルカイ族の女性の盛装に使われる。八本の糸は、主要色（黄色）の糸四本と補助色（赤と緑）の糸二本ずつで構成される。

⑲三色の編紐帯
パイワン族とルカイ族の服飾や一部用品の装飾に使われる。黄・赤・緑の三色の毛糸、それぞれ二本ずつ使って、合計六本で編む。

⑳織物の仕上げ紐
製織が終了すると、前後両端に残された経糸を切り離し、その経糸を小さく束ねて紐状に撚りを付ける。その方法は、織物を平らに開いておいてから、一組に数本ずつの二組の経糸を取る。二組の糸をまっすぐに引っ張りながら掌と太ももの間に挟んで、各組の糸に同じ方向の強い撚りを付け、最後に二組の糸を合わせて一緒に反対方向に撚りを付ける。

(5)まとめ

本研究は、各種族の織物における文様特性を明らかし、台湾原住民族の織物の文様の体系化を試みてきた。色彩の研究では、各種族の織物に表している色彩を視感測定を行い、台湾原住民族の織物にみた織物の色彩は、これまで研究が進んだ西洋の諸民族の色彩文化発達とは異なる発達ルートを経ていることも明らかになった。技術の研究では、台湾原住民族の織物の分析、考察によって得られた技術を生かして、各族の代表的な織物の複製を行い、原住民族の織物の構造原理を明らかにした。

本研究を通して得られた織物の文様、色彩、制作技術、象徴、信仰観念の原理を手がかりに、今日の「台湾原住民」伝統文化への保存と創造を目指す新しい「台湾原住民デザイン論」を、実践的に構築していきたいと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計6件）

①黄國賓『記号とデザイン―台湾原住民族のデザイン語法を読む』Graphic/design No.5 左右社、査読なし、2012（決定）

②曾啓雄、王伯勛、黄國賓『台湾原住民の社会組織とその服飾色彩について』2010 6th SMTE Sixth International Conference on Science, Mathematics and Technology Education. 査読あり、2010

③Tsai, Yu Shan『Research on Taiwan Indigenous Textiles, the Project of Taiwan Indigenous Teachers Training Course in Textiles』Chinese Textile and clothing culture center,Department of textiles and clothing, Fu Jen catholic University.査読あり、2010、p26～p33

④曽和英子『台湾原住民の色彩認識発達の推移―パイワン・ルカイ族の民族言語および衣住生活についてのフィールド調査に基づいて』日本生活文化史学会誌、査読あり、2010.9.18

⑤黄國賓『台灣原住民傳統服裝之現状―從傳統織物試探台灣原住民的地域織紋特性』2009 国際編織文化論壇、査読あり、2009

⑥黄國賓『台湾原住民の伝統服装にみた地方の文様特色―ルカイ族（霧台村）とパイワン族（七佳村）両地の文様の比較を通して』神戸芸術工科大学紀要　芸術工学2009、査読あり、2009

〔学会発表〕（計2件）

①曾啓雄、王伯勛、黄國賓『台湾における泰雅族の織品紋様についての研究』日本デザイン学会、テーマセッションデザイン理論･方法論研究部会、査読あり、2012.6.24

②曽和英子・黄國賓・齊木崇人『台湾原住民の社会組織とその服飾色彩について』日本生活文化史学会、京都ノートルダム女子大学、査読あり、2010.9.16

〔図書〕（計2件）

①黄國賓、曽和英子、齊木崇人、松本美保子、杉浦康平、蔡玉珊、王伯勛『台湾原住民13族の伝統的織物の制作技術と文様色彩にみるアジアンデザインの構造比較』報告書、神戸芸術工科大学、2012、330.P

②蔡玉珊など(共著)『變與不變 (植物染十年軌跡展)』台灣工藝推廣叢書第30号、國立台灣工藝發展中心發行、2010、p78～92

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/report/11-01.html

http://www.tribaltextiles.info/community/viewtopic.php?p=6776#6776

http://www.tribaltextiles.info/community/viewtopic.php?p=4669#4669

６．研究組織

(1)研究代表者
黄　國賓（HUANG KUO-PIN）
神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・助手
研究者番号：50441382

(2)研究分担者
杉浦　康平（SUGIURA KOHEI）
神戸芸術工科大学・名誉教授
研究者番号：00226432

(3)研究分担者
齊木　崇人（SAIKI TAKAHITO）
神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授
研究者番号：90195967

(4)研究分担者
松本　美保子（MATSUMOTO MIHOKO）
神戸芸術工科大学・名誉教授
研究者番号：90219519

(5)研究分担者
曽和　英子（SOWA EIKO）
神戸芸術工科大学・アジアンデザイン研究所客員研究員
研究者番号：80537134

(6)海外研究協力者
蔡 玉珊（YUS SHAN TSAI）
台湾輔仁大学・副教授

(7)海外研究協力者
曾 啓雄（ZENG QI-XIONG）
台湾雲林科技大学・教授

(8)海外研究協力者
洪 明宏（HONG MIN-HON）
台湾高雄師範大学・教授

(9)海外研究協力者
王 伯勛（WANG BO-XUN）
台湾雲林科技大学・博士課程